

## VI 日豪の比較結果と今後の課題及び提言

以上のように、本調査は、「日本における外国人との共生」を取り上げ、その共生を妨げる心理・社会的要因を調査し、問題点の指摘と対策を検討する目的で行われた。その際に、他民族国家として、外国人との共存をはかっているオーストラリアでの取り組みや実態調査をしながら、両国の比較研究も試みた。多民族多文化主義を標榜するオーストラリアの現状について調査することは、近年、急増する定住外国人及びその家族、とくに少年を巡る諸問題、グローバルな共生を考える上で意義がある。社会的な異質性をひろく捉えることで、我々の身近な問題を客観的に考察できることがわかった。これからの共生社会と定住外国人の問題を考える場合、こうした国際比較研究が不可欠になっていくだろう。

本研究の結果の詳細については、今後関連学会で発表していく予定であるが、本研究によって明らかになった、日豪両国で共通した問題、いずれかの国に特有な問題を以下にまとめる。まず共通した問題であるが、程度の差こそあれ、外国に対する地域社会の理解が十分でないことがあげられる。その具体的な例としては、日本語及び英語の支援、学習支援活動などである。また、異文化への適応については、成人と比べ、それほど大きな問題要因にはなっていないが、逆に、個人のアイデンティティをどこに立脚させるかが悩みの一つになっている。なお、男女の適応差については、十分な検証ができなかった。次に、日本側に特有の問題であるが、外国人を取り巻く環境に住む日本人の共生社会に対する意識が、概して低いことが上げられる。こうした意識の低さは、外国人問題にどのように関わっていくかと深い関係がある。それとあわせ、ボランティア組織の拡充の必要性があげられる。こうした問題を解決するために、今後公的な支援が不可欠になっていくであろう。最後にオーストラリア特有の問題であるが、将来に職業について、はっきり述べられない割合が高いことが指摘されている。男子は、弁護士とコンピュータ技術関係が比較的多く、女子は、会計士を中心とし、ビジネス関係に高い人気が集まっているが、そうした職業に就くためには、かなり高度の英語が要求される。次に、オーストラリアのベトナム人学生は、故国ベトナムの言葉や文化に対してのこだわりもかなり強い。これは、日本のケースと異なり、グローバルな社会で生きていくことと、ベトナム人としての個人的アイデンティティが、人格形成時には苦悩する要因として捉えられるが、けっして、ぶつかりあう障害物ではないことを教育していくことも重要な政策の一つであろう。